

木魚の顔

長谷川時雨

青空文庫

ねずみこそう

鼠小僧の住んでいた、三光新道のクダりに、三光

いなり

稲荷のあつたことを書きおとした。三光稲荷は失走人

の足止の願がけと、鼠をとる猫の行衛ゆくえ不明の訴うったえをきく

不思議な商あきない業のお稲荷さんで、猫の絵馬が沢山かか

つていた。霊れいげん験いやちこであつたと見え、たま、五

郎、白、ゆき、なぞの年月や、失走時や、猫姿を白紙

に書いて張りつけてあつた。その近くに鼠小僧の隠れ

家があつたわけになる。

油町あたりの呉服商の細君であつた祖母が、鼠小僧

の人柄なぞをどうして知っていたのかと思つたら、そ

のころ祖母夫婦は、がくやじんみち樂屋新道——ふきや葺屋町、あま堺町、すまな
どの芝居に近い——の附近に住つていた。場処がらで
気らくに暮っていたと見え、近所のおか岡つ引のびき細君と仲
をよくしていたという。自然そんなことから鼠小僧の
引廻しも見たのであろう。

七ツのアンポンタンに、九ツのアンポンタンに、十一、十二の
アンポンタンにおぼろげながら近くの町の人の生活ぶりや身近な
人たちのそれがぼんやりとうつつてきて、いよいよ言様のないさびないさびしさ
と、期望しても期望してもみた満されわびない佗しさがあつた。譬たとえて見
れば、お正月になつたらにぎや賑かだらう、——賑かだらうという漠然

とした思いのなかに、子供の空想と希望と理想が充満している。それが元がんとん旦の夕方ちかくなると、ああ、もう日が暮れるのにと、どうしていいかわからない物足りなさが憂鬱ゆううつをもつてくる。それにも似た——事はまるで違うが、日々ひびにぶつかかる余儀ないさびしさだった。

ある日、あたしは母の父の顔を穴のあくほど凝じつと見た。この老お爺じいさんは寺院おてらで見る大木魚おおもくぎよのような顔をしていた。木魚は小さいのは可愛らしいものであるが、大きなのが菌ふとんを敷いて座つていると、かなりガクガクとした平たい四角である。老爺おじいさんの顔も大きな四角なお出額でこで顎あごも張っている。そのくせ鼻は丸く安座あぐらをかいていて小さい目は好人物というより、滑稽こっけい味のある剥身むきみに

似た、これもけんそんな眼だ。白い髭ひげが鼻の下にガサガサと生はえて、十二月の野原の薄すすぎのような頭髮が、デコボコな禿はげた頭にヒョロヒョロしている。悪口すれば、侏儒くもすけともいえる、ずんぐりと低い醜い人だ。

その前にも逢あつたかも知れないが、アンポンタンが意識した初対面の印象だった。彼の身辺まわりは石炭酸の香かおりがプンプンした。

「ヒョウソになる性たちだから、これは働きながらでは無理だ。」

そういつて女中を——台所働きの女中をおさんどんと呼ぶころだった。そのおさんが昨日きのう足とがの裏を咎めたのを気にしないでいたらば、熱が出て腫はれあがったのを診察して、養生にかえすようにと言った。

老爺おじいさんが洋科のお医者が出来るのも初耳だった。あたしの家は頑固で、漢法医にばかりかかつて練ねりやく薬だの、振りだしだのを飲ませ、外傷きざずには貝殻へ入れた膏こうやく薬をつけさせていたから——洋科の医者といえばハイカラなものと思つていたあたしは、石炭酸の匂いに厳肅になり、この汚ない老爺さんに呆然ぼうぜんとしていた。そのまた老爺さんの言語ことばがふるつてゐる。

「長谷川うじ氏は元氣かな。」

長谷川うじ氏——あたしの父で、彼の婿である。常磐津ときわづの師匠の格子戸へ犬の糞ふんをぬつた不良若衆で、当時でのモダン代言人である。——あたしは、彼のデコボコ頭の凹ひくみにたまつた埃ごみをながめた。

以下、その老爺さんの生活の断片で、アンポンタンの眼に映つたヒルムの屑くずである。

すべてのことに転々とする人を見るとさびしい焦燥を他人ひとごとながら感じて、石が汗をかくようなにじみだす涙がこみあげてくる時がある。生れながらの性さがもあろうが、ピッタリと、ものに廻りあわぬ悲しい人たちなのである。蚕でさえ心にあうところのあるまで、繭をかける場処を選んで、与えられた木の枝の、果はしからはしまで歩き廻る——それは何やら満されない本能の求めなのではなかるうか——老爺さん湯川氏も、自分の本質を空しくして、ただ長く生きた九十年の生涯である。

老爺さんは、湯川というのも自分の本姓ほんせいではない。仙台屋敷

に生れたから仙台様の藩士だろう。お留守居役だともきいたが、廻かいまい米の事に明るかった。父親もその役だったと見える訳があるから、江戸で生れた東北系の人である。

廻米とは仙台領の米を船で廻してくることで、その領地米を江戸邸やしきで受取る役人なのだ。江戸詰の藩士の禄高通り全部米で与えたものなのか。あるいは金に代えて渡したものなのか。よくきいておかなかつた。当時の蔵前の札ふださし差や、浜方などとの取引関係から、数算にたけ、世估せこに長じていなければならぬ、いわゆる世渡り上手の人物でなければならぬのに、湯川氏はみいりのよい父祖の職をきらつて御直参おじきさんの株をかつた。直参といえはさいはよいが、木こつ葉は旗本、貧乏御家人ごけにんの、その御家人の株を買

つて、湯川金左衛門邦純くにすみとなつたのである。湯川という姓は無
論買つた家の姓で、金左衛門も通り名である。しかも、養父――
名ばかりの、御家人株の売手が拾歳ととお下なので、嘘うその年齢が出来上
つたために、娘たちを妹にして幕府のにんべつちよう人別帳に記入して貰い、
とにかく御直参にはなつた。が、すぐに幕府は瓦解がかいした。株を売
つた真の徳川御家人の一人は、先見の明めいをほこつて、小金貸こがねかしで
もはじめたであろうが、みじめなのは、新湯川ニユー金左衛門邦純であ
つた。

もつとおじい

尤も老爺おじいさんの妻の父親が、上野輪王寺りんのうじの宮みやに何か教えてい
た××安芸守あきのかみという旗本で、法親王が白河へお落ちになつてから
建白書のようなものを書いて死んだ人であり、身寄りにも上野の

彰義隊しょうぎたいで死んだ若ものもあつたから、算盤そろばんをはじく武士より直参武士になれと進められたのかも知れない。とはいえ新御直参一家は、五月十六日朝の官軍上野攻めで狼狽あわてた。いよいよ敗軍ときくと逃出す騒さわぎで、什器じゅうきを池のなかに投込んだり——上野山下の商家では店の穴蔵へ入れたという——井戸へ入れておいたりして逃出した。老爺さんの二女——総領娘はある大名邸やしきに御殿奉公をしていた——私の母は九歳だったが、男おとこまげ鬚かみにしていたので小刀を差して連れられて逃げた。吉原の土手下で夜を明した時、どこのものが名物の土手の金きんつばをくれたが、その大きさとうまささを何時までも忘れなかつたと言つた。そうしてこの新御直参一家はみずから没落し、徳川十六代亀かめのすけ之助様のお供、静岡

蟄居ちつきよというはめにおちた。

品川から出た二艘にそうの幕府の汽船に押し積まれて静岡へまでもつれてゆかれる幾百戸かの家族、それは徳川にしても厄介ものだったに違いない、ついてゆかねばならぬというものの中には、こうした一家もあつたのだ。静岡へいったからとて何の当あてがあるのでなし、百姓泣かせがいちどきに流れこんだのだった。命と体だけを積んでもらつた故、勿論もちろん論ろんたいしたものを持つてゆきはしない、家財はみんな捨てていったのだ——こんな時だとて、上のもの方はどうにかなつたであろうが、耕す土地とてそうあろうわけはなし、無禄無扶持むろくむふちになつた小殿様たちは、三百年の太平逸いっぺら楽らくに奢おごつて、細身ほそみの刀も重おもいといつた連中である。忽たちまちにして

畑の芋盗人いもどろぼうとなり、奥方は賃仕事をして糊口ここうをしのいだ。

湯川氏の家では不用になった袴はかまが商品に化けた。仙台平せんだいひらや博

多かたの財袋かたがつくられて売られた。お百姓がお客様なのであるが、

売手おそに怖おそれて近寄らないのと、売る方でも気まりが悪いので、七た

なばた

夕なばたの星まつりのように篠ささきの枝えだへ幾個いくつもくくりつけて、百姓の通

る道みちばたに出しておいて銭ぜにに代えた。

幕府の瓦解は御直参と威張った旗本、御家人の墜落ばかりでな

く、大名も廃藩置県はいはんちけんとなったから、湯川の姉娘も帰ってきた。

ともかく、わびしさのつづく中に振り袖姿の年頃の娘を見る事は

親たちは嬉しかった。この娘だけが失わずにいた衣装道具を、失

わさずにおかせたいと思った。とはいえ用捨ようしやなく生活こころの代しろは詰

るばかりである。それを助けるためにお供の連中は遠州御前崎えんしゅうおまえに塩田えんでんをつくれとなつた。

あたしの母は十二になつて、屈強くつきやうな体力をもつていた。姉と妹二人はどうにもならなかつた。彼女は小船を漕いだ。彼女が今でも一番恋しい景色は遠州御前崎の今切れの渡しいまぎのところと味方が原だという。彼女は早あさまだき抹ま、父親をはげまして自ら小船を漕いで塩浜へとゆく。十二の彼女の海水しおの撒まきぶりには及ぶものがなかつたほど、終日を働はたらきくらした。

と姉娘に縁談が起つた。親たちは江戸がえりの娘の美しさゆえに——と思つた善人である、先方が旗本で、旗本が口をきいてくれたのだからといった具合で悦よろこんだ。仲人なこうどが来た。夏のこと

はくせん
白扇をサラリと開くと懐ふところから贈物の目録書と、水引みずひきをかけた封金を出して乗せたが、

「芽出度御受納めでたくくださるように。」

と丁重に述べておいて、下げた頭をあげると、動作のゆっくりした湯川氏が手をださぬうちに扇かなめの要をくるりと向けかえて、

「御同様に、此方様こなたさまからも御贈りおおくでござろうから、諸事節約、
緊縮きんしゆくして——」

とかなんとか浜口内閣のようなことを言つて、もつてきた結納ゆいのう金をまた懐中に入れてしまった。それでも好人物な、他人ひとを疑うことをしない夫婦は、悦びだけを受入れ、悦びの意だけを空っぽで渡した。

——あたしの母は、今でも言う、姉さんが味方が原の秋草の中を、馬に乗って美しい振袖を着ていった。これはお前にやるよといったものまでみんなもって行ってしまった。お嫁にゆくとなつたらケチになつて、何もかも持っていった。姉さんが御奉公に出たころは、家も富貴だったので、市ヶ谷のあまぎげや（有名な呉服店）で、好みで染めさせたものばかりだったが、私は子供心にもこの嫁入りの仲人が変だと思つた。昔のお金は小判で重いのに、包んできた水引のかかった奉書は薄っぺらで軽かつた。よつぽどたつて嫁入りさきにたずねていったら、連合つれあいも、姑も、姉も、みんながあたしの姉さんの着物を着ていた。

無力の巧たくんだ一種の略奪であつた。さすがの御直参湯川氏も考

えさせられた。これではならないと働きものの二女を伴つて江戸へ出た。江戸には住みすてた邸やしきもある。池の中には何かしらが残つていよう。深川佐賀町の廻船問屋には自分の妹が片附いている。商人には障さわりがなかつたということが彼を心強くさせもした。

紅葉もみぢを踏んで箱根の山も越した。以前の住家すみかへゆくと玄関の両側にたてた提灯の定じょうもん紋もんは古びきつて以前のままだが、上方の

藩の侍が住んでいて、取次の男が眼をむいて睨にらんだ。家財なぞしらんと——だが深川の商取引の活かつぱつ澆しょうさは昔どころではなく、澆はつらつ

測として大きな機運が動いていた。義弟の佐賀町の廻船問屋石川佐兵衛の店では、仙台藩時代の彼の緻密ちみつな数算ちまつぶりを知つたので手を開いてむかえた。働きものの小娘は気むずかしい伯母おば

のこまづか小間使いになつた。

だが、人間をあやつる傀儡師かいらいしはなんといいたずらをしようとするのか、この湯川氏が、働きものの二女を芸妓に売ろうと思つたり、また、この小娘が未来に教育界の先駆者せんくしやとなろうとしたのをさせなかつたり——彼女に手習いを教えた女学者が、この子を養つて自分の意志をつらぬかせたいと懇望したが許さなかつたのだつた。

石川佐兵衛は暗愚でも、時流が廻米、廻船問屋というものを恵んだ。そこに湯川氏の数算と長年の蘊蓄うんちくが役に立って石川の家運はあがつた。その頃の湯川氏の知己の名は自毛村じけむらであるとか、みのむら三野村だとか銚そうそう々たる大実業家となつた人たちである。石川屋

は三井物産前身の如きものだともきいたが、やがて石川屋は没落し、それよりずっと前に湯川氏はまた動きだした。あたしが知つた老爺おじいさん湯川氏は、それからずっと後の彼だったのだ。

あたしの家うちで——彼のいう長谷川うじ氏の宅で、彼のために小晩ばんざ餐ん会かいが催もされたことがある。彼の老妻や、他の娘や、娘たちの婿めいめいなども寄りあつまつたが、客座敷ではなく常の食事をする室で、各自膳ぜんで車座になつてお酒も出た。

「いや、どうも、かくお手厚ごきようおうい御饗応ごきようおうにあつては恐縮おそくのいたり
で——」

木魚の顔が赤くなつて、しどく豊ゆたかに、隠居いんきよじみた笑いを浮べ

て、目をシヨボシヨボさせながら繰返していつていた。

「老爺さん、こんどこそはひとつモノにして下さい、なにしろ君にいためられた皆みんなが浮かばないよ。こつちの家うちだって、なんだかんだって大変だあね。」

そういったのは姉娘の婿——遠州では仲人にたつた旗本だった。「それは大丈夫だ、こんどはウンと皆をよろこばせる。」

もうその頃は七十位だったのであろうが、遠くへ単ひとり独でゆくよ
うな様子だった。

「味噌も米も困らないように送つてあるから。」

と彼の老妻はつぶやくようにいった。そしてみんなが何どこ処へか送つていった。

「牛肉の佃煮つくだにでも送つてやったら——」

父がその後、母にむかつていつていた。

「だが、今度もあてにはならないぞ。」

そういうふうには彼は二年も三年も漂ひようぜん然ぜんといなくなつて、現

れるとムツツリとした風貌ふうぼうを示し、やがてまた人々に送られて、

至極満足そうなニコニコ顔で出かけた。

そうした祖父の存在は子供たちからは忘れがちで、外祖母は

末の娘と二人で住んでいるものだとはばかり思った。上野下の青石

横町に住んでいたころも、根岸のお行ぎようの松のすぐきわに、音無川

の前にいたころもそうだった。老嬢おうるどみすになつた娘のミシン台と

たんすがひとさお一棹ひとさおあるきりのわびしい暮しかただった。どうしてこ

んなにガランとしているのかと思つたが、それはみんな湯川氏が硫黄発見に入れこんでしまうのだつた。たまたまとまりにいつた時、祖父が帰つてきたりすると、妙な風躰ふうていをした男がぞろぞろくるので嫌いやでならなかつたが、家に帰つて父に訊きくと、父はまたかというようので、

「老爺おじいさんまた賺だまされなければいいが。」
と呶つぶやいた。彼の周囲のものも、僅きん少しょうな家禄放還金かろくをみんな老爺さんの硫黄熱のために失われてしまつているのだということ、あたしたちも段々に悟さとつた。

なにが湯川老人をそんなに硫黄狂人にさせたか知るものがない。

ともかく四十年からの彼の事業である。重に北の方を歩いてきたが小笠原島あたりにもなんのためか長くいた。山のめききは凄^{すご}いほど当ったが、訓練にも工夫をつんだが、悲しいかな老爺さんの発明は、丁度お直参の株をかつたのと同じようにいつも世界の年代からおくれている。強情で頑固なところが最進智識をすこしも求めようとしないで、自己流の工夫でコツコツやるのだった。そのうちに年月は十年も十五年も飛び去る。老爺さんの頭はだんだん凸凹が多く深くなって、黴^{かび}がはえたようにそのくぼみに埃^{ほこり}がたま^{まる}る――

ある時、ヒヨックリと現われた湯川氏は、赤い毛布^{ケット}をマントのよう^{てぬぐい}に着手^{のど}拭^でで咽喉^{のど}のところ^に結びつけていた。山籠^{やまごも}りか

ら急に自分の家にもゆかず長谷川氏うじをたずねて来たのである。いそがしい父の小閑ひまを見ては膝ひざをすりあわせるようにして座りこんでいた。いつも鉾山やまのことになると訥弁とつべんが能弁のうべんになる——というより、対手あいてがどんなに困ろうが話をひっこませないのだ。父は他人ひとの紛糾ふんきゆう事件で家族に飯をたべさせているのだから、煩わづらわしいことをきくので頭が一ぱいであつたらうに、例の大木魚の顔がムズと前に出たらダニのように離れない。私は子供ながらハラハラした。父の前からはなるたけ離れているように家族は心懸けている。父も子供にも小言もいわない位に離れているのに——で、私は好奇だからでもなんでもなく、なるだけ大木魚の老爺さんの顔を自分の前にもつてくるようにした。一体アンポンタンは

家のものから遠ざかってポカンとしてばかりいたのに、木魚の老爺さんとだけ話をするのでよつぽど妙だったかもしれない。

「おじいさんに おそれさん 恐山へでも連れてつてもらうがいい。熊とおじいさんと三人で住むんだ。」

そんな事を大人はいつて笑った。

アンポンタンと湯川氏はポツンポツンと問答をはじめた。

「おじいさんの頭はどうしてこうデコボコになったの？」

「小笠原島で亀かめの子の卵をあんまりたべたので、勢せいがついてデコボコになってしまった。」

「小笠原島の亀の子って、大きいの？」

アンポンタンは、背中に題目を彫られた大きな亀がつかまって、

も一度海にはなされるとき、お酒をのませたのを覚えていて、その二尺五寸もある甲を思いうかべていた。

「そうだよ、大きな亀の子が揃って出て来て、浜の砂を掘って、ズラリと並べて卵を生んでゆくのだ。人間はそれを盗むのだからいけないな。」

「おじいさんも盗んだの？」

「そうだよ、盗んで幾個も食べた。」

「なんのために食べたの？」

「長生ながいきをするためにさ。」

「何故なぜ？」

「硫黄を——質たちのいい硫黄を製造して——硫黄の出る山はウンと

見てあるのだけれど——お前のお父さんが承知さえしてくれれば……」

おじいさんはなたまめキセル刀豆煙管をジユツと吸った。

「おそれさん恐山に熊が出るの？」

「出てくるがなんともしない。」

「どんな風に行っているの？」

「しちよう紙帳とていつてな、紙で張った蚊帳かやみたいなものを釣って寝るのだ。寒さよけにもなるしな、火を焚たいておくと、熊はくるがおとなしいよ。」

私は熊の子と友達になつてもいいなという気持ちになる。紙帳のことは『あさま浅間が嶽だけ』という、くさぞうし双紙でおなじみになっている、

星影土右衛門という月代さかゆきのたった凄すごい男が、六部の姿で、仕込み杖づえをぬきかけている姿をおもいだし、大きな木魚面の、デコボコ頭の、チンチクリンの老人を凝じっと見詰みつめた。

「おじいさんは硫黄山へ何もかもつきこんでしまったのだったって？」
「出来上ればみんなを悦よろこばせるのだが——」

おじいさんは、版下を書くように、細かく綺麗きれな字を帳面一ぱいに書きつけたのを出した。分らない私にも説明しようとした。
四寸ばかりな算盤そろばんをだして幾度いくたびもはじいた。

老爺おやぢさんの根氣に負けて、父が福島県下へ連れてゆかれたのは、磐梯山ばんだいさんだか吾妻山あづまさんだかが破裂したすぐあとだった。父はへト

へトになって帰って来て座らないうちに入った。

「出来るだけのことならしてやろうよ、あの年でたいした気根だ
」。

あの老人が山へはいると仙人のように身軽になって、岩の上な
んぞはピョンピョンと飛んでしまい、険けわしい個所ではスーツと消
てしまったように見えなくなる。気がつくはると遙か向うでコツコツ
何かやっている。さながら、人跡未踏じんせきみとうの山奥が、生れながらの
住家のようで、七十を越した人などとはとても思われぬ。山の
案内人などの話でも老爺さんが一足踏ふみ入れて、あるといった山
に硫黄のなかつたためしがなく、歩いていると、ふと向うの山の
格好を見て言いあてる。土地の者たちも神様のように言っている

というのだった。

「だが、宿は温泉だといっておいて赤湯だの、ぬる湯だのと、変な板かこいの小屋へ連れていって、魚の御馳走だといつて、どじようを生なまのまま味噌汁おつけの椀わんへ入れられたには——」

とすつかり閉口していた。でも、どうやらこうやら父から出資させる事になって老爺さんは欣きん々きんと勇んだ。情にもろくつて、金むとんじやくに無頓着な父は、細かい計算をよく嘯かまなかった。損徳よりもただ幾分の出資を捨る気でしたのだったろう。

老爺さんが得意になると、今まで冷笑していた親類みよりのものが手伝い志願を申出た。自分たちも損をしただけ取りかえそうという、御直参旗本の当主や子や孫である。

梅干うめぼし幾樽、沢庵たくあん幾樽、寝具類幾行李こり——種々な荷物が送られた。御直参氏たちは三河島の菜漬なづけがなければ困るという連中であるから、行くとすぐに一人ずつ一人ずつ落伍らくごして帰って来てしまった。そして言うことはおなじだった。

「何しろ、一ひとくわ鍬いれるとポンと強く硫黄が匂うのだから、胸が苦しくつて飯も食えない。」

老爺さんの硫黄はよく出来た。しかし近間の山林は官林なので、民有林から伐木ぼつぼくして薪まきを運ぶのに、嶮岨けんそな峰を牛の背でやった。製煉せいれんされた硫黄も汽車の便がある土地まで牛や馬が運んだ。東京や横浜へ送られると、運賃と相殺そうさいでファイになってしまう。

その後も幾度か繰返された失敗のあとで、晩年を湯川氏夫妻は
 長谷川氏に引きとられた。八十を越しても硫黄の熱は燃^{もえ}ていた。
 小さい机にしがみついたまま、贅^{ぜいたく}沢は身の毒になると、螢火^{ぼたるび}
 の火鉢に手をかざし、毛布^{ケット}を着て座っていた。例により珠算^{たまざん}と、
 細かい字と、硫黄の標本をつくつたり、種々にして手に入れる硫
 黄の一つまみを燃したり製煉したりして、庭隅に小さな釜をこし
 らえたりして首をひねっていた。その頃は父も閑散^{かんさん}な身となつ
 て佃^{つくだじま}島にすんで土いじりをしていたので、一所に植木いじり
 はしていたが——たまたま粹^{いっすい}な客などが来て、海にむかった室で
 昼間の一酔^{いっすい}に八十翁もよばれてほろよいになると、とてもよい
 声で、哥沢^{うたざわ}の「白酒^{しろざけ}」を、素人^{しろうと}にはめずらしい唄^{うた}いぶりを

した。もう大人になっていた私が吃驚びっくりすると、老人の老妻は得意で、

「おじいさんは、お金を湯水のようにつかった、いきな人ですよ。」
と彼女も小声で嬉しそうに口の中で何か唄った。

「おじいさんには面白いおはなしもございますのさ。私がね、誰かの初はつのお節句のおり、神田へ買ものゆきますとね、前の方に、粋いきな女たちにとりまかれて賑かにゆく人がありますのでね、おやおや、何処どこの大尽だいじんかと見ますとね。小つぽけな旦那だんなで、黒ちりめんの羽織で、お刀がチョココンと突っぱって、その風采ふうさいのみつともなさってたら、あたくしが吹きだしますとね、その人が後を

振りむきましたのですよ、どうもあの老爺おじいさんに違いないのですが、あたくしもよく似た人があるものだと思つて感心いたしました。が……」

クスクスおばあさんは笑つた。その結果がふるつている。

「よくまあ、あんな綺麗きれいな粹まことな女おんなが惚ほれたものでございますねえ。」

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木魚の顔

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>